

書 評

Darryll Grantley and Peter Roberts (eds.) :
Christopher Marlowe and English Renaissance Culture
 Scholar Press, 1996. xi + 281 pp.

この本は、クリストファ・マーロウの没後 400 年に当たる 1993 年、マーロウの生誕地カンタベリーのケント大学で開かれた国際学会での発表 14 本から成る論文集であるが、一言でいえば、マーロウを彼の生きた時代の文化的歴史的背景のなかに位置づけようとする企てで、その学際性を共通の特色とする。14 本のなかには、当然のことながら、個人的に興味のあるものとなないものがあり、また枚数の関係もあるので、主だったものを、掲載順に、みていくことにする。

最初の Andrew Butcher の論文は、“onelye a boye called Christopher Mowle” というタイトルだが、これは、1573 年 5 月カンタベリーの Elizabeth Dyer という 19 歳の女性が John Roydon という男性から受けた性的暴行事件に関する裁判記録に登場する、証人の少年のことである。少年は事件そのものを目撃したわけではないが、最後に両者と事件現場の地下酒蔵に行った者として記録のなかにその名が出てくる。Butcher は ‘The silent and innocent witness’こそが少年 Christopher Marlowe ではなかったかと推測する。彼の論文は、しかし、その後、移民だったマーロウの両親の結婚や、父親が職人として社会的に一応の成功をいかに収めるにいたったかの話に移り、それによってマーロウの少年時代の家庭環境や社会状況がある程度明らかになるとはいえ、また論文の最後に冒頭の問題に駆け足で戻っているとはいえ、肝心の Mowle と Marlowe の関係は推測あるいは期待の域を出ないまま論を終えているという感が否めない。もっともそれは Butcher も承知のうえで、彼はむしろ、少年から青年へのマーロウのこのいわば ‘a liminal journey’こそ、あるいは広くマーロウの両親や当時のカンタベリーの置かれていた ‘liminality’こそ、今後のマーロウ研究が向かうべき時代であり分野であると考えているようだ。そのことに異論はないとしても、この分野に関し今後新しい資料がどれだけ出るか、

仮に出たとして、どの程度確かな資料かがはっきりしない限り、その成果に関しては依然として未知数といわねばならない。

2 番めの Peter Roberts の論文 (“The ‘Studious Artizan’: Christopher Marlowe, Canterbury and Cambridge”) は、マーロウのカンタベリーとケンブリッジ時代、芝居や役者に対して学校や教会がとった態度や、マーロウが MA を取るに際しての枢密院の動き、とりわけ同じカンタベリー出身でケンブリッジに進んだ ‘Sir Francis Walsingham’s secretaries’ の一人 Nicholas Faunt がマーロウを諜報機関に誘いこんだ可能性を探る部分は、ミステリーがかって興味深いが、残念ながらこれも推測の域を大きく越えるものではない。

3 番目の論文は Charles Nicholl の “‘At Middleborough’: Some Reflections on Marlowe’s Visit to the Low Countries in 1592” で、それによれば、Ovid の恋愛詩 *Elegies* のマーロウによる翻訳本は Middleborough で印刷されたと扉にあるが、それはイギリスの Middlesborough ではなくオランダの Middelburg だという。それも、猥褻すぎてイギリスでは出版できない場合の例になり偽の外国名を使ったのではなく、マーロウ自身 1590 年代の初頭、実際にオランダで政府のスパイとしてカソリックの亡命者たちの動きを探っており、その関係でオランダの印刷所からの出版も可能だったのだという。こうして、詩人としてのマーロウと諜報員としてのマーロウが急接近することになる。程度の差はあれ推測に基づく部分があるという点でも、マーロウの詩と実生活の関わりを問うという点でも、これまでの論文と基本的立場は同じだが、三本の中では最も興味深かった。マーロウのスパイ説それ自体は目新しくはないが、論文の焦点が絞られていて短編推理小説のような趣を漂わせているせいかもしれない。もっとも、同時に、マーロウが生きた時代とマーロウという人物の「謎」が深まりもし、不安な思いにさせられもする論文である。

4 番めの論文は Richard Wilson の “Visible Bullets: *Tamburlaine the Great* and Ivan the Terrible” だが、これが Greenblatt の “Invisible Bullets: Renaissance Authority and Its Subversion” を意識した論文であることはタイトルからも明らかだ。Wilson の指摘にもあるように、Greenblatt は、マーロウヴィアン・ヒーローズが「生きねばならぬ投企としての生」は所詮「幻想」

であるとみている。そのうえで、彼等には、そしてマーロウ自身にも、「社会が大切にしている正統を侮り、文化が嫌悪し恐怖しているものを大切にし、本気を冗談に冗談を本気に変え、自己破壊を愛しそのエネルギーの無政府的解放を目指す」遊びの精神が認められが、これはいわば「深淵の淵における遊び」、あるいは「絶対の遊戯」であるとする。こうした実存哲学がかった解釈に対して、Wilson は異を唱える。『タンバレイン』論に絞っても、Greenblatt は、タンバレインが征服を重ね絶えず移動する空間の「無意味性」や「抽象性」を強調するのに対し、Wilson は、「遊び／遊戯」(Play/Game) であるとしても、それは本物の遊戯で、タンバレインの投企や期待は当時のロンドン商人たちのそれと正確に重なる点が重要なのだという。タンバレインの「電撃的攻勢」が Oretelius の地図に深く依存していることも、イワン雷帝の権力と財力に裏打ちされたモスクワ会社とエリザベス朝イングランドが密接な関係をもっていたことも（「無敵艦隊を破った英国艦隊はロシアの索具で艀装されていた」という）事実だろう。しかし、Wilson が、モスクワ会社のロンドン(デットフォード)における「代理人」(agent) がマーロウの親戚筋の Anthony Marlowe だったことを根拠に、マーロウのデットフォードにおける死の関連性を探る論には、危うさが付きまとう。とはいえ、筆者にとっては、いろいろな意味で興味を引かれた論文の一つであった。

5 番目の論文は “*Massacre at Paris and the Reputation of Henri III of France*” という David Potter の論文だが割愛する。6 番目と 7 番目は、どちらも、『タンバレイン』を当時の文化や歴史とからめて論じたもので、その点では似ているが力点の置き所に違いがある。6 番目の Nick de Somogyi の論文では、“*Marlowe’s Maps of War*” というタイトルが示唆するごとく、Ortelius を始め当時の世界地図が戦争を遂行し描写するために必要不可欠な存在であったこと、その点ではマーロウの描くルネサンス・ヒーローズも例外ではなかったことが、先ず確認される。そのうえで、特に『タンバレイン』と Oretelius の *Teatrum orbis Terrarum* との深い関わりが指摘される。そのこと自体は特に目新しいことではなく、重要なのはむしろ、第 32 回日本シェイクスピア学会のセミナー（「マーロウとその時代」、筆者もメンバーの一人として参加）で埼玉

大学の中野春夫氏が鋭く指摘されたように、マーロウが「この劇作品における地理学の情報をことごとく Oretelius の *Theatrum orbis Terrarum* (アントウェルペン、初版 1570 年) に依拠してしまうために、劇世界が表現する時間的設定と空間的設定の間にずれが生じてしまうことである」。7 番目の Thomas Cartelli の論文 “Marlowe and the New World” では、マーロウの作品にみる「新世界」への 8 個の直接的言及が確認されたあと、タンバレインの征服にともなう圧倒的な破壊行為が、スペインの征服と植民地化にともなう破壊性や暴力性とからめて論じられる。タンバレインの行動と『タンバレイン』の劇世界が、現実の歴史や文化と合わせ鏡となって、不気味な光を放つのは、そのような時である。

8 番目の論文は Roger Sales の “The Stage, the Scaffold and the Spectators: The Struggle for Power in Marlowe’s *Jew of Malta*” だが、タイトルが示唆するごとく、彼はここで、stage のドラマと scaffold のドラマの関連性について考察している。エリザベス朝にあっては「舞台」と「断頭台」は交換可能な語で、断頭台における処刑はいわば即興の劇であった。もっとも、それによって権力が誇示されたかという点、必ずしもそうとばかりはいえず、権力に対する挑戦の場として利用された場合もある。そのことは、劇場という断頭台の場合も同じである。論文の前半では当時の処刑の実例がいくつか考察され、後半では、『マルタ島のユダヤ人』の最終場、バラバスの処刑のアンビヴァレントな意味が、ファーニーズの立場の不安定さとかからめて論じられる。「ルネサンスの刑罰に関して最近の歴史家たちが行う説明は Foucault の *Discipline and Punish: The Birth of the Prison* から多大の影響を受けている」。フーコーがエリザベス朝の刑罰を直接扱っていないことを強調しつつ、それでもやはりこの種の問題に関しては、フーコーのいう ‘a theatre of Hell’ がらみの論が解明のための手掛かりになることを、Sales 自身実証している。この論文は短いものだが、エリザベス朝演劇に登場するさまざまな処刑の場を考察するに当たって、一つのモデル・ケースになるかもしれない。少なくとも、筆者自身、この種の問題についても考察してみたいとの意欲を掻き立てられた。

9 番目の論文は Nicholas Davidson の “Christopher Marlowe and Athe-

ism”だが、マーロウに対する「無神論者」という非難や告発が確かな根拠に欠ける、文字どおり括弧付きのものであり信頼に値しないことが、あるいは、この時代特有のごくありふれたもので20世紀的な意味での無神論者と同一視すべきでないことが、さまざまな資料を基に論じられる。穏当な結論というべきだろう。10番目の論文は、Gareth Roberts “Necromantic Books : Chrisopher Marlowe, *Doctor Faustus* and Agrippa of Nettesheim” だが、この論文で彼は(1)マーロウがアグリッパについて何か知っていたか、あるいはアグリッパの著作を何か読んでいたか、(2)アグリッパとフォースタスおよびマーロウ、さらに彼等の著作を併せて考察することから何がえられるか、という二つの問題に取り組むつもりだという。その結果はというと、マーロウはアグリッパの著書を読んでおり、マーロウの『フォースタス』の中の詳細な魔術(の儀式)に関する描写はアグリッパから取られた確率が高いこと、アグリッパはフォースタスの人物像構成に寄与しているが逆もまた真であることが明らかになったとして、マーロウにおけるテキストとヒストリーのダイナミックな関係を再確認して終わる。物足りなさを禁じえない。11番目の Lawrence Normand の論文 “‘What passions call you these?': *Edward II* and James VI” では両者に関わる ‘homoeroticism’ の言説が考察され、12番目の Michael Hattaway の論文 “Christopher Marlowe : Ideology and subversion” でも ‘homosexuality’ の問題が取り上げられているが、枚数の関係もあり、これ以上ここでは触れない。

13番目の論文はこの本の編者の一人、Darryll Grantley の “‘What means this shew?': Theatricalism, Camp and Subversion in *Doctor Faustus* and *The Jew of Malta*” だが、論者は、この2作品において特に前面に押し出されている theatricalism(論者の言葉を借りるかたちでいえば、「theatreの自意識的使用」)がマーロウの作品における subversion の基盤に横たわっていると指摘する。したがって、以下の論では、「演劇／劇場」(theatre)や「観客」とからめて、バラバスやファニーーズやフォースタスのアクションの特徴を検討することが、主要な作業となる。その点でいえば、マーロウの作品の (figureでもあり characterでもある) ドラマティック・ペルソナについての見解を十分に

示していない（と、彼がみる）Greenblatt とも一線を画する。例えば『マルタ島のユダヤ人』の場合、バラバスとファーニーズはともにマキャベリアンであるとはいえ、ファーニーズの劇世界が儀式的で、国家中心的で、権力を誇示し、文化的にも政治的にもその行動が事前にいわば「台本化されている」等の特徴を有するのに対し、バラバスの劇世界はファーニーズとは違う意味で演劇的で、個人的な陰謀と策略の世界で、権力の隠蔽に基盤をおき、「即興的である」等の特徴を有する。特に、両者の子供の死に対する態度は対照的で、ファーニーズが息子の死を本気で悲しみ報復を誓うのに対し、バラバスの悲しみは、娘の死ではなく、彼女の改宗にある。台本化されたファーニーズに中心をおく言説と即興的なバラバスに中心をおく言説との関係をとおして、権力の国家的パラダイムが疑問視される。バラバスの策略の劇は、現実には、ファーニーズのアクションによって要請されており、前者の陰謀は、常に最終的に、後者の行動に対する反応である。以上が『マルタ島のユダヤ人』論の骨子だが、新歴史主義への確かな目配りを有しながらそれに溺れることなく、具体的な作品の根本構造と深層部に、theatricalism の観点から肉薄する姿勢には、共感を覚える。たとえその結論がそれほど目新しくなくとも、具体的な作品論を欠いた、専ら推測に基づく新歴史主義的アプローチにみられた危うさがないぶん、安心して読める。もっとも、だから評価できないという向きも、当然だろう。後半は『フォースタス』論だが、再びこの芝居の theatricalism が、「道德劇的形態」を選択したこととからめて論じられる。フォースタスも、figure と character の両方の見地から見られねばならない。フォースタスは神権政治的な人間観と人文主義的な人間観の葛藤の場であり、侵犯的人物というよりそのような葛藤の典型的なのだ。何も目新しいところがないかもしれないという不満は、この論文にもある。

『マルタ島のユダヤ人』論の二番煎じ的なところも目につくが、論文の構成上、当然ともいえる。Greenblatt や Dollimore 等も視野におさめつつ theatricalism の視点から論じた手堅い論文というところだが、個人的には『マルタ島のユダヤ人』から受けたインパクトのほうが強い。

最後の論文は Alexander Shurbanov の “Marlowe and the Internalization of Irony” だが、さまざまなレベルにおける irony がマーロウの主要作品に則

して考察される。例えば、‘parallelistic and peripeteic ironies’の立場から『タンバレイン』における Zenocrate の死やタンバレイン自身の最期や『フォースタス』における「老人」(The Old Man)の導入が論じられ、『フォースタス』はまた‘interpersonage and intrapersonage irony’の視点から捉えられたりもする。『マルタ島のユダヤ人』に関しては、‘peripeteic irony’の立場からの分析の必要性が強調される一方、マーロウの劇のなかでは最初の‘character irony’に依存する芝居であることが指摘される。最後に‘plot irony’と‘character irony’の立場から『エドワード二世』が論じられて終わりになるが、一見最近の批評の流れとは無関係にみえて、実は Dollimore や Greenblatt への言及があることから明らかなごとく、彼等の批評を意識しつつ、それとは違う切り口での分析を目指していると、一応はいえる。しかしその際、irony が現在にも通用する有効な武器となりうるかは、疑問である。

以上本書に収められためばしい論文を掲載順に読んできて思うことは、今や歴史や文化と切り離して純粋に文学作品を論じることは不可能に近いが、したがって、マーロウを彼の生きた時代の文化的歴史的背景のなかに位置づけるというのは目的として当然ではあろうが、理想的な形でのこの種の批評は、正直なところ、想像以上に難しいということである。一応は所期の目的は達成していると仮に認めるにしても、論文集である以上避け難いことであるとはいえ、論文によってのバラツキは当然あるし、立論の基礎を最終的に推測や希望におく論文は、特に一次資料に直接当たる機会の少ない日本人にとっては、反論のしようがないというだけでなく、危うくて近寄り難い面がある。14本の論文の間には、例えば、最初の数本が特にマーロウと彼の生きた時代の関係についての考察だったり、作品別の緩やかな纏まりがあったりするが、それ以上の明確な方針があるわけではなく、掲載順にも格別の意味があるとも思えない。しかし、具体的な作品のアクションとからめて文化や歴史が論じられるとき、あるいは、たとえそれが過大な要求であるにしても、論文に文化性や歴史性だけでなくそれと深く関わる形で具体性、物語性、神秘性(謎解きの魅力)、論理性等が加わるとき、純粋に文学だけを恣意的に論じた論文にはない輝きが出る。この論文集のなかに、それも筆者が取りあげた範囲のなかで、あえてそのような

論文を探すとすれば、3、4、8、13あたりであろうか。(これは関西シェイクスピア研究会、1997年6月例会の書評で取りあげられた本である。)

——三益隆一